

研 究 分 野	海洋構造	部名	浅海環境部
研 究 課 題 名	浅海定線調査		
予 算 区 分	国補 (国1/2)		
試験研究実施年度・研究期間	S. 47 ~ H. 19		
担 当	今井 美代子		
協 力 ・ 分 担 関 係	なし		

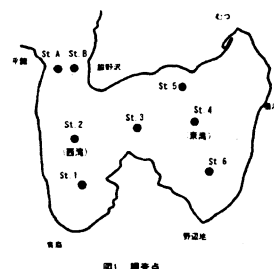
〈目的〉

本課題は、陸奥湾の海況の特徴や経年変動などを把握し、海況予報のための基礎資料を得ることを目的として実施し、本年度は継続35年目の調査年次であった。

〈試験研究方法〉

- 1 調査海域 陸奥湾内 St. 1~6 の6 定点、湾口部 St. A, B の2 定点、計8 定点(図1)
- 2 調査回数 毎月1回
- 3 調査方法及び項目

- ①気象、海象 : 天気、雲量、気温、気圧、風向・風力、波浪
- ②水色、透明度
- ③水温、塩分 : 0m, 5m, 10m 以深は底層(底上2m)まで10m 間隔
- ④溶存酸素量 : St. 1~6 の20m 層、底層及び St. 2 と4 の5m 層



〈結果の概要・要約〉

2006 年の海況の特徴

透明度の最低値は St. A の4月の8.0m で、最高値は St. 5 の5月の22.0m で、4,5月は平年よりやや高め~かなり高め、そのほかは概ね平年並みであった(図2)。

水温の最低値は、0m 層では湾口部の St. B のみ4月に、そのほかの St. 1~6, A で2~3月に、20m 層と底層では全調査点で2~3月にみられた。湾全体の年間最低水温は、全て St. 5 の2月で、0m 層は2.50℃、20m 層は2.42℃、底層は2.40℃であった。最高値は、0m 層では8,9月に、20m 層では9月に、底層では St. A で8月に、St. B で11月に、St. 1~6 で9,10月にみられた。湾全体の年間最高水温は、0m 層では St. 2, 6 の8月の24.0℃、20m 層では St. 6 の9月の23.66℃、底層では St. 6 の9月の19.40℃であった。

水温の年間の推移は、平年に比べ、1月は平年並み~かなり低め、2~4月はやや低め~かなり低め、5月は表層付近で平年並み~やや高めのほかはやや低め~かなり低め、6月はやや低め~かなり低め、7~8月は概ね平年並み、9月は上層でやや高め、下層は平年並み~かなり低め、10~11月は概ね平年並み、12月はやや高めであった(図2)。

塩分の年間の最低値は、0m 層では St. 1 の7月の30.73、20m 層では St. 4 の6月の32.78、底層では St. 6 の10月の33.02 であった。年間の最高値は、全て St. B の5月に記録され、0m 層、20m 層では3月にそれぞれ34.02、34.01、底層では9月の34.32 であった。

塩分の年間の推移は、1月~4月は平年並み~やや低め、5月はやや低め、6月は概ねやや低め、7~8月は平年並み~やや低め、9月は概ね平年並み、10~11月は概ねやや低め、12月はやや低め~かなり低めであった(図2)。

溶存酸素量は、St. 1 では20m 層で4月に、St. 5 では底層で2月に、このほかの調査点、観測層では3月に3月に年間最高となった。この後は低下傾向が続き、St. 1, 2 の底層で8月に、このほかの調査点では9~10月に年間最低となった。20m 層の最低値は St. 6 の9月の6.82mg/L(飽和度98%)、底層では、年間の最低値は St. 4 の9月に4.53mg/L(飽和度56%)と、水産用水基準記載の「底生生物の生息のために最低限維持しなければならない底層の溶存酸素量4.3mg/l」をわずかに上回る値が記録されたほか、St. 3 の10月にも5.66mg/L(飽和度71%)となり酸素の少ない状態がみられたが、いずれも翌月調査時には回復しており、長期にわたるものではなかった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

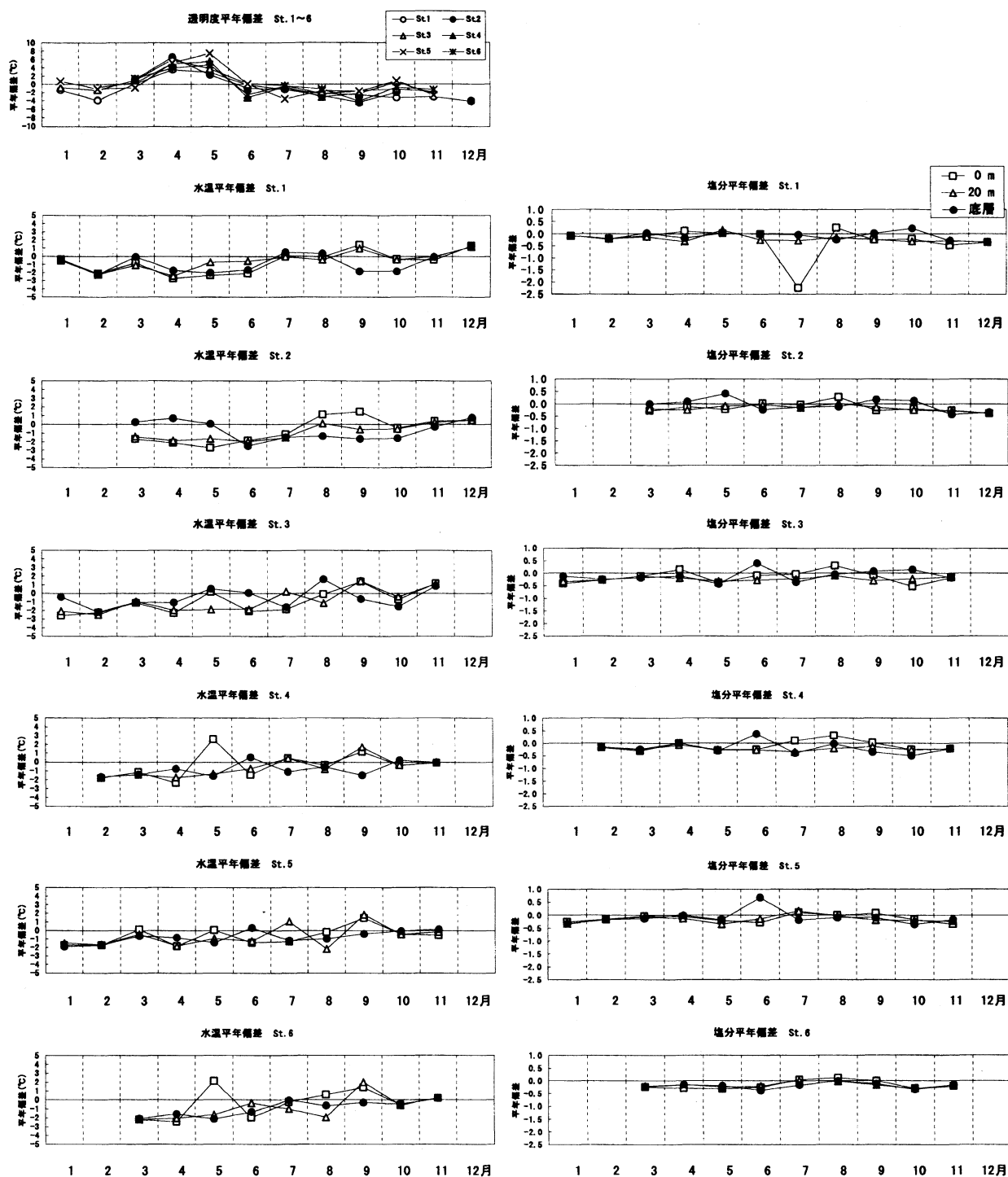


図2 2006年の透明度、水温、塩分の年平均偏差の推移(年平均値は1972～2005年の平均値)

〈今後の問題点〉

冬期間に特に欠測が多く発生する湾口部の St. A, B の観測データの蓄積。

〈次年度の具体的計画〉

調査の継続と特に成層期の溶存酸素量の監視を強化する。

〈結果の発表・活用状況等〉

平成 18 年度資源管理体制強化実施推進事業浅海定線調査結果報告書 (陸奥湾)